



子どもたちを守る

2012 ふくしまキッズ 冬のプログラム 活動報告

「福島県の子どもたちほど幸せな子供達はいない」と、やがて言われる日が、間違いなく来るだろうと、確信しております。全て皆さまの貴いご支援の賜物です。



2012 ふくしまキッズ冬

全プログラム終了報告とご挨拶

ふくしまキッズ実行委員会

委員長
進士 徹震災原発
事故から1
年9ヶ月が
経過する中、
目に見えな
い、臭いもない放射線との暮らしを強い
られる環境になった福島県。ここで生き
ることを決めたご家族にとって、身体的
だけでなく、メンタル面でも保護者の皆
様の苦悩は大変であると思います。そう
した皆様をなんとか支援したいと始まっ
たふくしまキッズですが、2012年の
冬の活動は12月30日を持って終了しまし
た。北海道2コース（ゆうばり・大沼）…
124人 横浜…64人 愛媛…30人 福
島県内…33人 合計251人の子どもが
参加してくれました。

皆様に書いていただいた「ふくしま
メッセージ」を、今回も受け入れ地に福
島の今の声としてしっかりと届けたい
しました。参加した子どもたちは、い
ろんなことがある福島ですが、とにかくこ
のプログラムで「笑顔と元気」を充電出
来たと思っています。そして、一人一人
が今回の体験を積むことで様々な学びを
共有できたと思います。協力すること、
支え合うこと、少しの我慢をする事、相
手のことを考え思いやる心、気持ちよく
過ごせるために自分は何をすべきか！？
高学年になれば感じて行動に移せる年齢
です。そして何よりも放射線の事を心
配しないで、外で思いっきり遊べる環境
があったことが、子どもらしさを取り戻
せたこの活動が好きなことになっていることな

ど、一人一人が感じたことだと思っています。

初日の現地に向かうお見送りに来たお
父さん、お母さん達にも子どもの成長を
楽しみにお見送りをしていただきたありま
した。プログラムを終了してお出迎えの
今か今かと心待ちしている親御さん達を
見ていると、我々実行委員会と歩調が
合っていることも感じました。

子ども達は、ふくしまキッズのプログ
ラムを経験することで、心の成長は目覚
ましいと思っています。保護者の皆様か
ら「期間中はブログにたくさんお写真
をUPしてくれていたの、何も不安に
なることはなかった。帰って来るのが楽
しみ」とのお言葉を頂いております。

今回、支援委員の玄侑宗久さんから冬の
活動に向けて下記のメッセージを頂きま
した。

「ボランティアの皆さまへ」

年末のお忙しいときに、このプロジェ
クトのために多くの時間と労力を割いて
いただけることに、衷心より感謝申し上
げます。本当にありがとうございます。

私はなかなか邪魔することも叶わず、
申し訳なく思っておりますが、スタッフ
やボランティアの方々と参加する子供
達、そして保護者の皆さんとの間に、信
頼関係がどんどん厚く確実なものとして
広がっていくのを、遠目にも感じており
ます。

この国から希薄になりつつある「育む
心」が、このプログラムには横溢してい
るようです。未曾有の震災によって発生
した、未曾有のプロジェクトではないで
しょうか。

「福島県の子供達ほど幸せな子供達は
いない」と、やがて言われる日が、間違
いなく来るだろうと、私は確信しており
ます。全て皆さまの貴いご支援の賜物で
す。本当にありがとうございます。

2012年12月24日聖夜

支援委員の玄侑さんが言われるように251
人の子どもを支えてくれているのが今回約1,
000人のボランティアのマンパワーであり、
多くのご支援を頂いた方々がいていただか
らです。そのことも子どもたちはきちんと受け
止め感謝の心がまた増えた冬のプログラムでし
た。関わった全ての人に感謝申し上げます。

「ふくしまキッズ」のあゆみ

ふくしまキッズ実行委員会
副委員長 吉田博彦

ふくしまキッズの活動は、福島原発事故の放
射線汚染により直接
的、間接的に影響を
受けている福島の子
どもたちに、せめて
学校長期休暇期間
に、何の心配もなく、
思いきり「子どもをやつてもらおう」と同時に、
福島の子どもたちの学びと育ちを支援する教育
事業を実施し、多様な体験や人とのコミュニケー
ションを作り出すことで、将来の復興福島の担
い手を育成することを目的として、2011年
夏に活動を開始しました。

この活動を作り出すに当たって、子どもを参
加させる福島県保護者の皆様にも往復の交通費
相当分（生活保護家庭は全額無償）をご負担い
ただくこととしました。このことについては、
この活動開始の時は震災直後の被災地支援意識
が極めて強いときでしたから、当時は「無償で
やるべきだ」という声も強くありました。し
かし、子どもたちを育てる責任は社会だけでな
く、保護者もその一端を担っていたということ
がどうしても必要だと考え、保護者にも負
担していただくという方針を貫きました。そし
て、その他の諸経費すべて（生活費・活動費な
ど）は世界中から支援金の寄付を募って活動を

運営体制

委員長

進士 徹（NPO あぶくまエヌエスネット理事長）

全体総括・福島県内プログラム受け入れ担当

副委員長

吉田博彦（NPO 教育支援協会代表理事） 支援金募集・渉外担当

実行委員

宮本英樹（NPO ねおす理事） 北海道受け入れ担当

安江こずゑ（NPO 教育支援協会北海道代表理事） 事務局担当

青野信久（子どもの絆プロジェクト） 愛媛受け入れ担当

草野竹史（環境NPO ezorock）

北海道プログラム、ボランティア・コーディネーター担当

監査委員

金野栄太郎（公認会計士） 会計管理・決算管理担当

立川直樹（あずさ監査法人） 会計管理・決算管理担当

支援委員（50音順）

遠藤和章（北海道公民館協会事務局長）

玄侑宗久（作家・震災復興構想会議委員）

ジョン・ギヤスライト（中部大学教授・ツリークライミングジャパン代表）

白石康次郎（海洋冒険家）

田口ランディ（作家）

寺脇研（京都造形芸術大学教授）

戸塚隆（ジャーナリスト）

中島岳志（北海道大学大学院法学研究科准教授）

藤田保（立教大教授）

湯川れい子（音楽評論家・作詞家）

吉田研作（上智大学教授）

特別賛同人（50音順）

秋山豊寛（ジャーナリスト・宇宙飛行士・京都造形芸術大学教授）

新井満（作家・作詞作曲家）

鎌田實（医師・作家）

小林武史（音楽家・ap bank代表理事）

坂本龍一（音楽家）

辻井喬（詩人・作家）

西田敏行（俳優）

日野原重明（聖路加国際病院理事長・日本音楽療法学会理事長）

細川佳代子（NPO 法人勇気の翼インクルージョン2015理事長
公益法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長）

吉永小百合（俳優）

作り出すこととし、この冬の活動までに1億6千万円の支援金を集めることができました。

この支援金は東日本大震災復興支援財団をはじめとする日本国内の支援団体だけでなく、2,700万円という大きな支援金を2年間にわたってご寄付いただいたジャパンソサエティや2,000万のご寄付を頂いたグローバルギビングなどの海外の支援団体のご支援をはじめ、世界中から寄せられたものです。これまでご支援いただいた世界中の方々に本当に感謝申し上げます。そうした大きな支援が集まる中で、各支援者の方々からも「保護者も負担する」という考え方については高い評価を得ています。この活動が単なる「施し」ではなく、家庭と社会が協力して子どもを育てて行くという支援のあり方は、ふくしまキッズの活動の大切な理念であると思っています。

ふくしまキッズの活動にはもう一つ大きな目的と理念があります。この活動を継続的に実践する中で、その支援の輪を徐々に日本中に広め、日本社会に「子どもは社会で育てる」という考え方を定着させることです。これは確実に前に進んでおり、2011年の夏に子どもたちを引き受けてくれたのは北海道だけでしたが、2011年冬には北海道・横浜・愛媛で活動が始まり、2012年春には北海道・神奈川・長野・岐阜へと拡大し、2013年春にはこれまでの地域に加え、新潟・京都・兵庫・長崎・熊本と西日本に広がっています。

ふくしまキッズの事業実施に当たっては複数のNPOで実行委員会を結成し、会計を各NPOから独立させ、経費の使われ方を明確にしました。また、本事業の子どもたちの受け入れ地域では、ふくしまキッズの活動趣旨に賛同し、協力

関係をいただける受け地のNPOや自治体と協働して運営していただくようにして、できるだけ多くの市民にボランティアとして参加していただき、「大人がともに協力して」という協働の姿を実践して参りました。今後もこの方針は堅持し、日本全体で福島の子どもたちを支援する、そうした社会の実現に向けて活動を続けてまいります。

ふくしまキッズの活動には色々な誤解やそれに基づいた批判や質問が寄せられることがあります。

一番よく寄せられる批判は、ふくしまキッズが福島県内に住居をもつ家庭の子どもたちだけを対象としていることについてです。確かに、福島県外に避難している福島の子どもたちも大変な状況にあることは事実です。しかし、我々民間団体にできることには限界があり、今の目の前の放射線の脅威に悩む子どもたちに対して、原子力発電によって電力供給を福島に押し付けてきた我々社会の責任を果たすということをこの活動のミッションとしているため、現在福島県内で生活させざるを得ない子どもたちを参加の対象としていることをご理解いただければと存じます。

また、「ふくしまキッズの活動は原発運動だ」という誤解もあります。この活動に参加している団体や個人には色々な考えがあることは確かですが、実行委員や支援員の中には明確に原発の立場を明確にしている方もいらっしゃいます。しかし、原発であることが原発維持であるが、どのような考え方を所持する人も「子どもたちを守る」ということについては協力できるはずで、なぜなら、今回の原発事故により放出された核物質が放射線が子どもたちに影響を与えることを心配しない人はいないからです。

この活動の最初の段階で、私たち実行委員会は福島県庁にこの活動への協力要請に参りました。その時に福島県庁は「子どもたちを外に連れて行くというのは福島県が危険と思われる」ということで、「協力することができない」というご返事をいただきました。確かに風評被害によって影響を受けている福島の産業に対する責任というのを考えれば、そうした福島県庁の立場も理解できないわけではありません。しかし、福島県庁の方々が子どもたちに対する放射線による子どもたちへの影響を心配していないわけではないのです。

活動が始まってからこれまで、一つ一つの活動の終了ごとに福島県庁には報告に上がり、一回一回熱心に話を聴いていただきました。そうした中で、ふくしまキッズの活動に対する理解もしていただき、徐々に広報活動へ協力いただくなど協力体制が出来上がり、次の春のふくしまキッズの活動に福島県庁から支援金を出していただくところまでになりました。このように、我々の社会は「子どもを守る」ということについて必ず協力できるはずなのです。

いずれにしても、ふくしまキッズの活動はこの春の活動で2年目を終え、あと3年の継続の活動を何とか作り出すという段階に進んでまいりました。チェルノブイリの事故の時には、子どもたちへの放射線の影響がはつきりしたのは4年から5年経ったところからです。もしも5年経って何の影響も子どもたちに出ていなければ、ふくしまキッズの活動は安堵と喜びのうちに終えたいと思っています。しかし、甲状腺がんをはじめとして現在心配されている様々な影響が子どもたちに出てきたとするならば、それはもう民間のやることではなく、政府が国として責任を持つて対策を担うべきです。

何とかそれまでの間、ふくしまキッズの活動を継続する、これが我々ふくしまキッズ実行委員会の意思であり、ここまでのふくしまキッズのあゆみなのです。

2012年冬プログラムふくしまキッズの概要

10月 3日 ふくしまキッズ実行委員会
冬の活動内容と予算を確定

10月 8日 夏季林間学校東京報告会
この後北海道・愛媛で実施し、冬プログラム内容について支援者と協議

11月 17日・18日 夏季林間学校福島報告会
今後のふくしまキッズのあり方と冬プログラム内容について保護者と協議

12月 8日・9日 冬プログラム参加者説明会
3会場（福島・郡山・いわき）実施
この後北海道・愛媛で実施し、冬プログラムにおける活動内容の説明と研修

12月 9日 冬プログラムスタート福島から北海道・横浜・愛媛へ

12月 23日 冬プログラムスタート福島から北海道・横浜・愛媛へ

12月 30日 冬プログラム終了
北海道・横浜・愛媛から福島へ

全員無事に福島に帰還

2月 1日 ふくしまキッズ実行委員会
冬の活動総括と決算を確定

2月 24日 冬プログラム横浜報告会
この後北海道・愛媛で実施し、支援者の方々へ冬プログラムにおける活動総括と決算の報告と説明

3月 2日・3日 冬プログラム福島報告会
冬プログラムの活動総括と決算を保護者へ報告

北海道大沼プログラムの報告

上田 融

大沼プログラムは七飯町沼の流山温泉にある体験施設とネイパル森で実施しました。23日から30日までの7泊8日を総勢80名の参加者と約30名のスタッフが一緒に生活をともにします。



23日は子どもたちが生活環境の変化に慣れるためにネイパル森での宿泊体験がメインとなります。先に到着した郡山組の約50名はさっそく外で遊んでいます。移動に疲れていたもののやはりエネルギーを発散したい様子が見受けられました。遅れて到着した福島組も合流して食事後には全体オリエンテーションが行われました。まだまだ緊張の表情をくぐせない子どももいれば、ボランティアとの再開を喜びピーターなどの姿も見られました。ここでは自分の身の回りの物を集めるゲームをしたり、明日からのグループ分けをしたりと参加者とボランティアとのつながりを作るプログラムを実施しました。

24日の午前中はネイパル森の周りで雪遊びです。雪遊びの前に快適に行うための服装や装備を学びます。手袋やジャンパーの着方、スキーウェアの裾はどうしたらいいか?などのレクチャーを受けて装備を整えて遊びます。

この日の午後はメインの生活場所となる流山温泉に移動しました。移動の途中に婦人会館でク



リスマスパーティです。全員で行える楽しいゲームの後は、童謡をレゲエのリズムに乗せて歌うシンガー「Coda」さんによるコンサート、みんなでリズムに合わせて踊ったり歌ったり、最後にはおやつや歯ブラシなどのプレゼントもいただきました。25日は流山温泉で一日思いきり雪遊びを行う日です。まずは宿泊場所にスキーウェアを干すところを作ってから始まりです。自分たちで快適な居住空間を作ること、それが流山のベースに流れています。

午前中の雪遊びでは自由に子どもたちのやりたい遊びを行います。そり滑り、穴掘りボール遊びなどを行う子どもたちが多かったです。午後になるとこちらから遊びの強度を高めたプログラムを選んで遊ぶ「選択遊び」の時間です。ここでは選択遊びをボランティアの大学生が担当し遊びのプログラムを仕切っています。「雪合戦&ドッジボール」「冬の森探検&そり滑り」「室内でゆつくり」「たき火&馬車」「雪にお絵描き」などのプログラムにわかれて子どもたちが主体的に遊びを選ぶ場面を作りました。

26日から28日の期間は民泊です。環境の変化に対応してきた子どもたちも家庭を思い出す4日目ということもあってホームシックになりそうな子どもたちも温かい家庭と生活をともにすることで心身ともにリフレッシュすることが出来ます。受け入れ先では生活のお



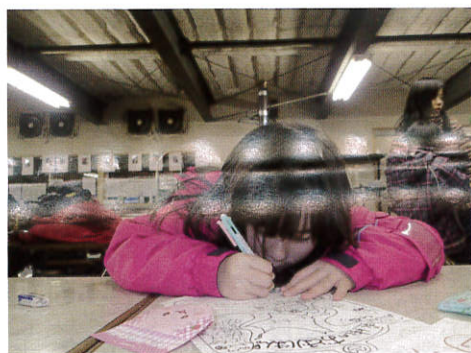
手伝いやお仕事体験、地域の方との交流などさまざまなプログラムが実施されました。

28日久しぶりに子どもたちが流山温泉に戻ってきました。夕食の後はそれぞれの民泊の思いを共有する民泊発表会です。振り返りシートには子どもたちからの思い出がずらり

と並びました。おいしいもの楽しかったことなど思いを巡らす表情から民泊先での満足度が伺えます。

29日は流山で遊べる最後の日。今日は午前中から選択遊び、子どもたちが民泊にいつていた間にボランティアが一生懸命考えたアクティビティを実施しました。「大沼の氷上運動会」「かまくらづくり」「雪の中で足湯」「そのりを使ったダイナミックアクティビティ」。遊びの強度も最初より少し高いものに設定してあります。

午後にはスタッフからの選択遊びが実施さ



れました。「雪中サウナ」「スノーモービルを使ったチューブひき」「大沼氷上つるつる選手権」など。

夕食を交えたクロージングセレモニーではボランティアが自ら企画・進行をつとめ、スライド上映やオリジナルソングの合唱などを盛り込んだ感動的な一部とキャンプファイヤーと夜の雪遊びを取り入れた2部構成のプログラムとなりました。一部では涙を見せた子どもも2部でははじめて遊んで楽しく最後の夜を迎えることができました。

30日は早朝に起床し準備して出発となりました。生活を徹底していたので身支度もスムーズに行うことができ、生活スペースの掃除も行うことが出来ました。最後はボランティアがバスを見送って終了となりました。

また食事提供の場面では料理研究家の方か

らレシビ・調理協力があり、調理をサポートする学生ボランティアが

一丸となり、安心安全な食事を提供する。ことにつとめました。また衛生面にも気を使い、食事

提供の方法や調理担当と子どもとの接触の軽減や、手洗いうがい徹底のための歌の作成などを行いました。子どもたちの健康管理では毎日の健康チェックを徹底して行い、体調不良者の早期隔離や室内移動時の消毒の徹底などの甲斐もあり、インフルエンザやノロウイルスなどの感染者が出ることがありませんでした。

大沼プログラムではボランティアが主体的にプログラムの企画や運営に関わるような仕組みになっており、自分の将来を見据えた活動の場としてボランティアが自立的に活動する場面が多くみられた。それは子どももボランティアにとってもコミュニケーション能力や伝達能力や統率力などのスキルアップにつながり、お互いに相乗効果を生んでいた。今後は子どもとの関わりやバックスタッフの活動に必要な技術や資金を継



る生活体験を中心とした中に、大沼という地域とのつながりを意識した自然体験やアクティビティ、民泊(旅)と言った要素をとり入れたプログラムを実施していきます。また地域住民、ボランティア、スタッフなど異年齢が一度に集うことができコミュニケーションをとることが出来る場として機能していきたいと考えています。



続的に支援する仕組みがあれば、子どもも関わるボランティアもふくしまキッズに参加することで更なる成長を望めると考えられます。今後も大沼プログラムは低学年も参加でき

ゆうばりプログラムの報告

能條 歩

ゆうばりプログラムは北海道三笠市にある北海道教育大学幌内自然体験学習研究施設にて実施されました。

ふくしまキッズたちは、23日の夜遅くに福島組と郡山組に分かれて到着しました。そして、7泊8日の日程で、深雪のなかでたくさんのお遊びを楽しんだり、ネイチャークラフト(自然の材料を使った工作)をしたりで過ごすゆうばりプログラムがいよいよスタート！翌日から活動は、木の枝をつかった名札作りでスタートです。自分で読んでほしい名前を決めて名札を作った後は、クリスマスパーティーの準備です。子どもたちは手分けして会場の飾り付けとケーキ作りに取り組みました。そして、クリスマスツリーに願い事を書いた木のプレートを下げ、みんなでごちそうを食べ、楽しい一夜を過ごしました。

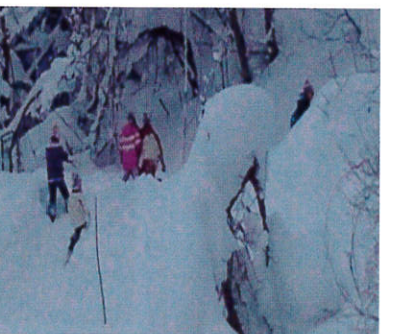


25日は、ゴムホースでかんじきを作った外遊び。そのままだと深い雪で腰まで埋まってしまうので、歩くための道具を作ってみようという遊びです。ひもを結ぶのが大変で、なかなかうまくできなかった子も。

冬の北海道は想像の通りの雪景色ですが、-10℃以下の気温のため、雪遊びに慣れていないためしめやけ寸前になることも。しかし、この数日間雪遊びの仕方とも体得し、後半は自由時間になると室内にはほとんど子どもたちがいなくなるようになりました。また、北海道にすんでいてもなかなかお目にかかれないダイヤモンドダストも見られました。

ので、楽しんで

でなく、冬の美しさを存分に感じてもらえたのではな



いでしょう

26日は、新聞紙・お茶

の出がらし・牛乳のパック等をつかってリサイクルペーパーはがきを作り、楽しかったこと・見せたいこと・おどろいたことなどを書き送りました(うまく届いているでしょうか?)

そして、ここ三笠は世界的に有名なアンモナイト化石の産地！博物館を見学してレプリカ作りに挑戦。自分より大きなアンモナイト化石にびっくりです。



たまには自分たちで食事を作ろう、ということと「うどん作り」にも挑戦してみました。腰のあるみごとな手ごねうどん、あつ



う間に食べてしまいました。

宿泊した施設の周辺には、お土産を帰るような場所がありませんでした。そこで、夕張から物産センターの方に出張販売にきてもらうことに。しかし、人気だったのはお土産よりも「メロン熊」という謎のゆるキャラでした。また、たまには自分たちで食事を作ろう、ということと「うどん作り」にも挑戦してみました。腰のあるみごとな手ごねうどんであつ



夜には環境教育体験の時間もありました。今回やって見たのは、遊びながら水の性質や資源としての重要性を学ぶ「プロジェクトWET」という活動の一つです。

そして冬を楽しむ活動として、スノーキャンドルもやりました。廃油を使つてろうそくを作り、それを使ったスノーキャンドルは、それはそれは美しく、暗くなっても子どもたちの集中は途切れませんでした。

最後はみんなで思い出作り(ふりかえり)として、カーテンに寄せ書きをしました。

ゆうばりプログラムでは、野外活動・ネイチャークラフト・自然散策・環境教育などを主とした体験でプログラムが組まれています。これからも、夏・冬・春とそれぞれの季節で自然と人との関係を楽しみながら感じるプログラムを提供していければと思っています。



北海道大沼プログラム

- 参加者数…77名
- 参加ボランティア数…35名
- ホームステイ引き受け家庭…25名
- 協力関係団体…NGO・NPO…4団体
- 地域協議会…4団体
- 企業…23社
- 協会…1団体
- 大学・高等学校他…2団体
- 自治体…2団体
- その他…4団体

ゆうばりプログラムin三笠

- 参加者数…47名
- 参加ボランティア数…15名
- 協力関係団体…NGO・NPO…1団体
- 地域協議会…1団体
- 企業…4社
- 大学・高等学校他…1団体
- 自治体…1団体
- その他…2団体

福島県内プログラム

- 参加者数…33名
- 参加ボランティア数…19名
- 協力関係団体…NGO・NPO…2団体
- 企業…3社
- 大学・高等学校他…1団体
- 自治体…1団体

横浜プログラム

- 参加者数…64名
- 参加ボランティア数…139名
- 協力関係団体…NGO・NPO…2団体
- 地域協議会…1団体
- 企業…4社
- その他…8団体

愛媛プログラム

- 参加者数…30名
- 参加ボランティア数…160名
- 協力関係団体…NGO・NPO…1団体
- 地域協議会…9団体
- 企業…17社
- 協会…1団体
- 大学・高等学校他…7団体
- 自治体…3団体
- その他…6団体

ふくしまキッズ 福島県冬プログラム活動報告

「ぼんた山元気楽校冬合宿」

進士 徹

○場所…福島県東白川郡鮫川村葉貫 乙の法人あぶくまエヌエスネット フィールド

○開催期間…2012年12月24日～29日 6日間

○参加児童…33人（小学1年生～6年生）

○協力スタッフ…19人

○活動内容…テーマ「大切にしている心・人・物・自分」

子ども達に笑顔と元気をたくさん充電して欲しい。子どもらしい6日間にする事。共同生活に必要なルールなど、一人一人が作り上げる6日間にしました。

○日課…

午前の部

7時 …起床、着替え、整理整頓 体操

8時 …朝食―午前の約束確認―片付け

9時 …学習タイム

10時 …自由選択制活動タイム「バスケットボール・びりり橋・ぼんた山遊び・ウォールクライミング…」

午後の部

12時 …昼食―午後の約束確認―片付け

13時 …全体活動「草原で活動・村体育館で活動」のどちらかを選択する。

16時 …犬散歩・夕食準備

17時30分…夕食―夜の約束確認―片付け

夜の部

18時30分…日記、健康記録。明日への会議（子ども当番を決める。日直、食事係、環境係、体操係、犬散歩）…この間にスタッフ会議。

19時30分…お風呂タイム 湯冷めしないように、お休み。

○イベント…

12月24日…ウェルカム、クリスマス夕食 子ども達の手作りケーキ 学生サンタ登場

25日…草原で遊ぶ「鬼ごっこ・サッカー・そり」

26日…石窯ピザ・村体育館で活動

27日…石窯パン・草原で遊ぶ

28日…餅つき・作品作り「一年を振り返る&来年の希望」温泉に行きました。

29日…雪が降りました。活動期間中を大切に振り返る。帰宅…

○感想…子ども達は日に日に元気がUPしていきました。山里に子どもの声が響き渡り、始終笑顔でいることが出来ました。学生スタッフの活躍も素晴らしく、子どもと共に過ごしてくれたことで、怪我もなく無事に最終日までプログラムは進行できました。共に過ごしたこの時間は「心の玉手箱」のように、楽しかった事がたくさん詰まっていると思います。外は氷点下の毎日でした。でも子ども達は真夏のような様子でした。子ども達は、鮫川村が建設を進めている高濃度放射性廃棄物の焼却炉が出来たら、ぼんた山の活動が出来なくなることや心配してくれました。低線量で子ども達も遊べるこの環境に作って欲しいです。子どもの笑顔のために、委員長としてこの環境を守り抜く覚悟です。ぼんた山にまた子ども達の元気な声が戻って来ますように…



横浜プログラムの報告

吉田 博彦

極寒の福島と郡山で保護者の皆さんの見送りを受け、2台のバスで64人の子どもたちが横浜に向かい、15時には横浜市金沢区の野島青少年活動センターに到着しました。センターホールでは、関係してくれる団体の代表者と多くのボランティアの方々顔合わせをして、いよいよ横浜プログラムがスタートです。

今回横浜プログラムでは保護者の皆さんに安心していただくために、左の写真のように自分の名札を通信機械にかざすと顔写真が保護者の皆さんの携帯電話に送られるというシステムを導入しました。運営する我々として



子どもたちは午前中近くの金沢動物園や横須賀の三笠公園など色々ところへお出かけして、午後からボランティアの学生たちが企画したクリスマスパーティーへ招待され、家を離れた横浜の地でクリスマスを楽しみました。



そして活動2日目の25日は「街体験活動」でした。東京スカイツリー体験から始まって、お台場ツアー、冬の湘南海岸体験など5つのコースのうちから好きなものを選択して出かけていきました。

帰ってきた子どもたちの感想で、「はじめてチョー満員電車に乗って、死にそうだった。大人になってあれに乗るのは絶対に嫌」というのがあり、この子は間違いなく福島の将来を担ってくれます。

26日には横浜の子どもたちも合流し、よりいっそう活動がにぎやかになり、27日には子どもも熱議で福島の子どもたちと横浜の子どもたちが「幸せって何だ」をテーマに話し合い、午後からは「だがしや楽校」で一緒に楽しみました。

28日は待ちに待った八景島シーパラダイスでの「おもいっきり遊園地体験」です。昨年は絶叫マシンに乗りすぎて気分を悪くした子どもも出ましたが、今年は事前の注意が徹底されたため、何とか無事に過ごし、朝の開

園から夕方まで一日楽しく過ごしました。

この日からこれまで生活した野島の青少年活動センターを離れ、生活の場所がフリースペースみなみというところへ移動しました。

29日には演劇を鑑賞した後、横浜ウォークラリーで横浜のみなとみらい地区を歩いたりしました。そして、そうこうしているうちに最終日の30日を迎え、いよいよお別れ的时候了。多くのボランティアの方々に見送られて、子どもたちは故郷・福島へと戻っていきます。

〈余談・横浜のインフルエンザ騒動〉

今回の横浜プログラムでは「インフルエンザの脅威」によって合計で8人の子どもたち



が横浜から福島へ途中で帰らなくてはならなくなりました。これまで10年自然体験活動の運営を行い、5回のふくしまキッズを経験してきましたが、今回のインフルエンザ問題を抱えた運営はこれまで経験したことがないほど本当に大変な一週間でした。高熱を突然発する子どもたちに対応しながら、他の子供たちの健康状態を見守り、その中でプログラムを進めるということ、本当にスタッフが良くやっただと思います。

途中の段階では活動を中止しないといけない状況もあり、深夜までの看病と救急病院

へ発病した子どもを連れて行くなどの作業の中、それでも次の日のプログラムを楽しみにして眠りに着く子どもたちを見てみると何とか継続をという気持ちで30日の朝を迎えました。

こんなこともありました。今回、インフルエンザで初日に福島に帰った3名の兄弟が、29日の昨日から復帰しました。「どうしても残りだけでも参加したい」とのこと、インフルエンザが快癒したとの診断書ができましたので、復帰させました。うれしい話で、友達やボランティアに大歓迎をされていました。これがふくしまキッズの真髄なのでしょう。今回、子どもたちの世話に当たった方々、活動を食事支えていただいた皆さん、そして多くの食料を送っていただいた北海道の皆さん。すべての皆さんの力で今回の活動が無事に終了したことをともに喜び合いたいと思います。本当

にありがとうございました。



愛媛プログラムの報告

青野 信久

〈第1日目 12月23日〉

23日夕方17時、ふくしまキッズの子ども達が無事愛媛の松山空港に到着しました。

宿泊する「潮風ふれあいの館」に到着後は、歓迎行事を兼ねたオリエンテーションを行い、滞在中のルールをみんなで決めました。「スタッフの話を聞く」「悪口を言わない」「整理整頓をする」「みんな仲良くケンカしない」という4つの素晴らしいルールが子ども達自身の意見で出来上がりました。

〈第2日目 12月24日〉

朝起きたらまず、詩の朗読（谷川俊太郎「朝のルー」）とラジオ体操を行いました。「朝」番に大きな声を出すと頭が目覚め、勉強がよくできるよになりま〜す」と伝えると全員楽しそうに朗読していました。

この日は、近くの道の駅「双海シーサイド公園」で、双海名物の「じゃこ天」作り体験と地元の子ども達と合同のクリスマスパーティーでした。

午前中のじゃこ天作り体験が終わった後、自由時間に全員が海に一直線。波打ち際で波を追いかけたり追いかけられたり……。真冬なのに膝下まで濡れに濡れた子や「泳ぎたい！」と真顔で言う子もいました。「今度は夏に遊びに来てほしいなあ。」と心から思っていました。

午後からのクリスマスパーティーでは地元松山のバンド「絶対！moderx ソルフェージュ」の皆さんがクリスマスソングを演奏していただきました。曲中にボーカルの方が海の方を指差すと大時化の海でサンタクロースがカヌーに乗って揺れていて、みんなとても驚いていました。海から上がったサンタとトナカイはびしょ濡れでしたが笑顔で素敵な踊りを披露して下さいました。

夕方には双海町の元教育長、若松進一さんに自伝日本一の双海の夕日のお話しをして頂きました。

「双海の夕日はブラジルのリオデジャネイロの朝日である」とか「夕焼けと小焼けの違い」などたくさんのお話をしていただきました。



児童に渡す為のプレゼントを作りました。子供達に翠小学校の子どもの写真を見せ、「翠小学校の児童も同じ様に皆さんの為にプレゼントを用意しています」と伝えると、全員が真剣な表情になり短時間ではありましたがとても素晴らしいプレゼントを作ってくれました。

完成後は、地元有志の方からいただいたクリスマスケーキを食べました。いただきますをしようとして座っていると、電気が消え、ハッピーバースデーの歌が流れだしました。この日が誕生日の子がいたので、みんな歌を歌いながらお祝いしました。本人もとても驚いた様子でしたが、すごく喜んでくれました。サプライズ大成功でした。

〈第3日目 12月25日〉

この日は県内最古の現役木造校舎の翠小学校に行きました。翠小学校では、福島の「福」と翠小学校の「みどり」から名付けた「ハッピーグリーン集」を開催して下さいました。

伊予市の教育長さんの歓迎の言葉から始まり、その後、全員で給食を食べました。愛媛と福島の給食の違いはあったのでしょうか？

食後は、翠小学校児童とふくしまキッズをこちゃ混ぜで8班に分け、8枚のパネルに色を塗ったりメッセージを書いたりした後、それを合わせて大きな1枚の絵を完成させました。もちろん、前日作成したプレゼント交換も行われました。普段19名の児童の学校はたいへん賑わっていました。「この学校に通いたい！」と言ってくれた子もいて、とても嬉しく感じました。

施設に戻った後は、希望者を集めて羽釜でのご飯炊き体験を行いました。火の危険性について十分に説明し、作業が始まるとすぐに耐火手袋をして現れた福島からの同行スタッフの嬉しそうなお表情とご飯炊きをする子ども達のキラキラした目が忘れられません。

また食後は、東北から愛媛に避難している方々のNPO「えひめ311」の皆さんが来て下さいました。代表の方が持つてきて下さった愛媛限定の高級みかん「紅まどな」はとっても美味しくて、あつという間になくなっていました。

〈第4日目 12月26日〉

この日のプログラムは伊予市中山町でのそば打ち体験とその近くのグラウンドで地元の子ども達との交流イチゴ狩り体験を行いました。

朝食を食べた後、中山町のそば打ち体験施設「クラフトの里」に移動し、各班に分かれてそば打ち体験をしました。初めての子どもが多かったのですが、みな上手で楽しそうに取り組んでいました。昼食はそのまま自分で作ったそばを食べました。



その後は、グラウンドに移動し、地元の中学生在が準備してくれた、テレビで放送されている「逃走中」というゲームを行いました。野球コートが3面取れる大きなグラウンドで中学生は必死で追いかけて、子ども達は捕まらぬように逃げ回っていました。

終了後、双海町でいちご園に行きました。今年はいちごの出来が早く、あまりたくさんありませんでしたが、それぞれが自分のとったいちごの大きさを競い合っていました。

また、この日の夕食は焼きそばでした。この日のご飯も前日とほぼ同じメンバに羽釜でご飯を炊いてくれました。

夜のプログラムでは翌朝にお別れとなる前半の学生ボランティアの皆さんにゲームをしていただきました。声を出さないで誕生日順に正確に並ぶゲームや猛獣狩り、班対抗の新聞破りなどをとても盛り上げていました。

〈第5日目 12月27日〉

この日は西予市に移動する日でした。この日はとても天気良く、何人かは丘の上にある施設の前の広場から海や遠くに見える九州や本州を眺めていました。

綺麗な景色を心に刻んでもらえたのでしょうか？この日は学生ボランティアの交代の日でもありました。5日間とても仲良くなったので、寂しそうでしたが、宿泊施設前でバスから手を振ってお別れをし、新しいスタッフと一緒に出発しました。

八幡浜市に着くと、八幡浜市長さんを先頭にたくさんの方々が出迎えて下さりました。3時間程の短い時間でしたが、名物八幡浜ちゃんぽん作り体験や、地元小学生とシャッフルゴルフなど濃密なプログラムを準備して待っていて下さいました。

その後、後半の宿泊地である西予市に移動しました。到着後の開会行事では、市長さんからの歓迎の言葉の後、ふくしまキッズの代表の子に「福島メッセージ」を読んでもらいました。昨年も愛媛プログラムに参加してくれたK君の朗読を聞きながら、K君の成長と「こんな思いをするのは僕達だけで十分です」という言葉に、涙が止まらずに流れていました。

その後、最終日まで一緒に生活をする地元の中学生スタッフとの自己紹介を終え、みんなとても楽しみにしていたみかん狩りをしました。多くの子ども達が愛媛に来てからみかんを食べたのには、またまたたくさんみかんをほおぼっていました。



キャンプサイトでした。綺麗なロッジやトレイラーハウスでの宿泊に子ども達はとても嬉しそうでした。

西予市最初の夕食は、隣接する温泉施設でのバイキングでした。お刺身、唐揚げ・しらたきなど、地元の食材満載でした。この日の夜のプログラムは真冬のなんとと肝試しでした。廃校になった中学校を使用するの肝試し……。希望者だけの参加でしたが、子供達はとても怖そうにしていました。何班かに分かれて言われた指令をクリアしながら進んでいく方式で行なわれたこの日の肝試しでは、予想通り切れる事無く悲鳴が聞こえていました。

〈第6日目 12月28日〉

この日は朝から雨天となり、何人かの子どもが楽しみにしていた海釣りも中止になりました。しかし、代わりに行なわれた体育館でのレクリエーションには、立リグ・四国アイランドリーグ「愛媛マンダリンパレーツ」に所属する選手にお越しいただき、参加者の野球小僧達とキャッチボールやゲームをしていただきました。

午後以降は予定通り、西予市宇和町の米博物館での雑巾がけレース「Zー1グランプリ」、宿泊地隣の温泉プール施設「クアテルメ宝泉坊」での水泳などが行なわれました。

「Zー1グランプリ」は昨年も実施されたので、昨年の記録上位者は、掲示板に名前が張り出されていて、昨年参加した子ども達は自分の名前を探したりしていました。

109mの廊下はとても長く、半数くらいの子が雑巾がけをしてへたばっていました。また、「クアテルメ宝泉坊」では福島で水泳があまりできていない影響もあって、いつまでもプールにいたいという子どもが、プールから一生懸命煮込んだシチュー



が振る舞われまし

た。また、

午後のは、地元の野村高校校模倣部の真剣な取り組みを見せて

いただいたり、福島の子どもと地元の子どもとの相撲対決が行なわれました。

初めは怖がって遠くから見ていた子ども達も次第にのめり込み、それぞれが自分のグループの子を応援し、たいへん盛り上がりしました。

〈第8日目 12月30日〉

最終日は起床後朝食を取り、すぐに荷物をまとめ、空港に向かいました。

空港では涙を見せる子もいて、スタッフの涙を誘っていました。無事お返しできる事への安堵感もありましたが、8日間愛情を注いだ子ども達との別れの寂しさを感じながら、空港の屋上から飛行機が見えなくなるまで見送りました。

震災から1年半以上が経過しての開催で、どのくらいの方がこのプログラムに賛同していただけるか不安もありましたが、たくさん地域の皆様から協力やご支援をいただきました。

また、回を重ねるごとに福島、愛媛でお互いの距離感が近くなり、絆が深まっていく事を実感しています。今後も出来る限りこのプログラムが継続し、他人の事を思いやる事ができる子ども達が増えていく事を望んでいます。

今回、子ども達の世話に当たった方々、活動を食事



ふくしまメッセージ

悩む日々の中・・・

福島で生活しながらも、このままで良いのかと悩む日々の中、安全な場所で少しでも保養をさせたいとこのふくしまキッズにたどり着きました。

月日が経つにつれ、周囲は事故前と変わらない生活に戻ってきています。各家庭での考え方にも新たな溝ができ、その状況で制限をかけ続けていくことが、母子ともに大きなストレスとなっていました。

少なからず不満や疑問を抱いていた子ども自身ですが、夏休みに始めてふくしまキッズに参加したことで変化が見られました。知らない土地で合う人が自分たちを守ってくれる、たくさんの愛情で包んでくれる、別れを惜しみ涙を流してくれる、そんな素晴らしい出会いを経験し、自分なりに少し整理がついたのかもしれない。『冬休みもふくしまキッズにいく』その強い思いが、場合によっては友だちとは違う選択をしなければならない中で、大きな心の支えになっているようです。

『放射能で嫌なことがあっても、良い人にいっぱい出会えて自分は幸せだ』と言う言葉を聞き、心温かく接してくださった方への感謝で胸が熱くなったことがあります。北海道の大停電のニュースを自分のことのように心配する姿を見て、皆様のお気持ちが子どもの心をしっかりと育ててくれていると、とてもありがたく感じたこともあります。子どもを大切に想って下さる方々がいる、安心して送り出せる場があるということで、親の心にも余裕ができ、今できることをしながらここで暮らしていく、迷いなくそう思えるようになりました。この先健康面での不安は変わりませんが、子どもが成長していくうえで、このふくしまキッズは、とても大きな意味をもつものになると考えています。

福島の子供達に普通の生活をさせたいと支援して下さるすべての方に心から感謝申し上げます。

ありがとう ふくしまキッズ

原発事故からもうすぐ2年になりますが、未だ福島で子育てをして良いのかと不安な毎日です。普通の遊びが出来ない環境だからせめてふくしまキッズに

参加しておもいきり外で遊び不安のない食事を取り、心身ともに保養出来ればと思い、参加させていましたが親元から離れての集団生活、受け入れ先での地域の方々との交流、沢山の出会いと別れを経験し娘は確実に成長しました。自立心が芽生え責任感も養われました。自分よりも弱いものに対しての優しい気持ちも強くなったと思います。3回目となる今回は愛媛に参加できる事になりましたが、準備はすべて自分でしました。私は不足していると行くものだけを渡しただけです。いよいよ明日は荷物を送ります。忘れ物があるかもしれませんがあえて確認はしませんでした。忘れた場合の対処も学んでくれると思うからです。この2年の間に急に大人になって寂しいですがふくしまキッズに参加するたびに大きくなる娘の成長が嬉しいです。将来壁に突き当たった時に自分で乗り越える事が出来る。このこなら大丈夫だと思える事が出来る。そうなれば福島で子育てをする私たちの不安は必ず低減すると思います。

福島将来を担う子どもを育成するという素晴らしい活動計画に賛同し感謝の気持ちでいあびですこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

ふくしまキッズのみなさんへ

ふくしまキッズに参加するのは夏の北海道Fコース

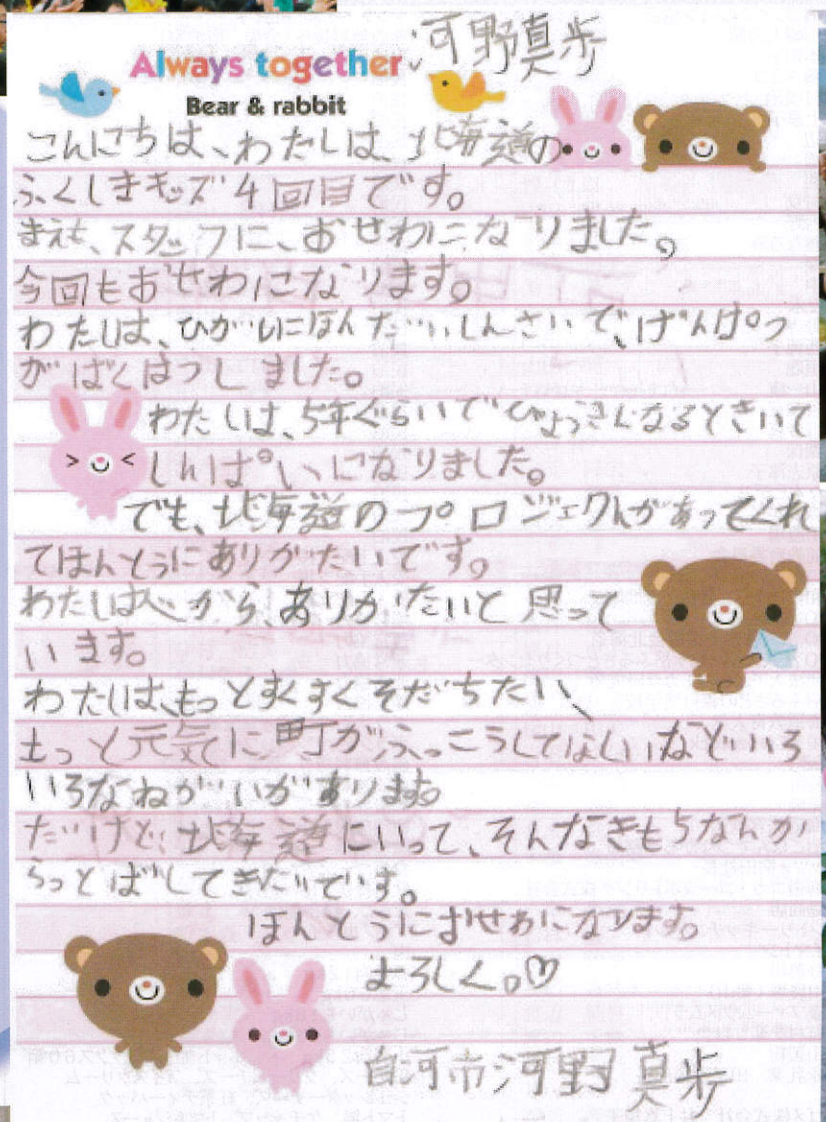
スにつづいて2回目です。夏にふくしまキッズで北海道に

行った時に外で思い切り走り回って遊んだり、森の中で葉っぱを拾い集めたり、ボートに乗って川遊びをしたり、色々な事をしてとても楽しく過ごせました。放射線の事も気にしないで活動することが出来たのも、北海道の皆さんやボランティアの皆さんのおかげだと思います。

皆さんにとっても優しくしてもらったことも忘れられません。ありがとうございました。

今回は夏とちがって、雪のたくさんふりつもる冬の北海道をとっても楽しみにしています。たくさん雪遊びしたいです。

よろしくお願いいたします 参加者 鈴木 秀之



「ふくしまキッズ」 スタッフ・ボランティアの皆様へ
この度は、北海道Fコースプログラムへ参加させて頂きまして、ありがとうございます。
福島は、思う様に除染が進まず、まだまだ制限のある中で子供達は生活している状況です。
本当は、もっともっと 外で思い切り遊ばせてあげたいのに・・・
北海道では、大自然の中で、キレイな空気を体一杯に吸い込んで、いっぱい遊んで、楽しんで来る事でしょう。そして、いろいろな体験も、沢山の人の関わりを通して、素晴らしい経験が出来ると思います。
このような機会をあたえて下さり本当にうれしく思っています。
ふくしまキッズの支援事業を支えて下さっている皆様は、心から感謝しています。
福島の子供達を愛し、守って下さって、ありがとうございます。

伊藤 朱里 母



宿泊先提供
実験プログラム実施
調理器具の提供・バス貸出
食事割引提供
シール、クリアファイル、カレンダー (10)
A5 ノート (70)
クリスマスプレゼント (43)
ノート (70)
「サンタ・カンパニー プレゼント大作戦！」 64 冊
消しゴム (20)
じゃがいも (30kg) トマトミックスジュース (24 缶)
白ネギ (5kg)、キャベツ (10kg)、大根 (11kg)、
人参 (8kg)
青梗菜 (60 束)、大根 (8kg)、もち米 (25kg)、
小松菜 (1 ケース)
クリスマスプレゼント (65)
みかん 250 個、プレゼント (2)
ハンドメイドプレゼント (65)
クリスマスプレゼント (7)
シール&クリアファイル (70)
パンダナ (70)
のり (1 缶)
玉ねぎ (100kg)
クリスマスカード (20)
手作りクリスマスオーナメント (10)
クリスマスプレゼント (50)
かぼちゃ(15kg)、りんご(20kg)、じゃがいも(10kg)
わかめ (1.5kg)
クリスマスプレゼント (34)
ミカン (69kg)
ホールコーン (4kg)、味噌 (3kg)、人参 (10kg)、
バター (1.2kg)、チーズ (720g)
スポンジ (30)、洗濯洗剤 (15)、食器洗い洗剤 (10)、
つゆの素 (15)、しょうゆ (20)、ボン酢 (20)
駄菓子 (1,355 点)
下敷き (100)・ハンドタオル (100)
油 3 本
木工体験活動プログラム実施
だがしや楽校参加者 (間伐材の鉛筆たてづくり)
だがしや楽校参加者 (アートバルーン)
だがしや楽校参加者 (手芸)
だがしや楽校参加者 (自転車世界一周の話と糸で
つなげる)
だがしや楽校参加者 (新聞紙遊び)
だがしや楽校参加者 (ハガキアート・写真入りキー
ホルダー)
もちつき実施応援
だがしや楽校参加者 (実験)
だがしや楽校参加者 (外遊び体験)
だがしや楽校参加者 (ハルーンアート)
だがしや楽校参加者 (かつお節削り体験)
だがしや楽校参加者 (ツリークライミング)

全期間人材提供
人材募集
飛行機旅費減額
夕食作り
夕食作り
夕食作り補助
会場、カヌー・レボ 60 個提供
じゃこ天体験、つみれ、鯛提供
じゃこ天体験人材提供
じゃこ天体験人材提供
24 日カヌー・レボのサタ、けが役（海からカヌーで登場）
24 日カヌー・レボでのバンド演奏
24 日カヌー・レボでのダンス演技
24 日昼食「ふるさと料理」材料代
25 日翠小学校交流プログラム会場提供、進行
26 日そば打ち体験料小学生 30 名分免除
26 日交流プログラム人材提供
夕食作り補助、26 日交流プログラム人材提供
26 日イゴ狩りイゴ代金減額
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験会場提供他
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
27 日八幡浜ちゃんぽん作り体験人材提供
西予市開催期間中人材提供
バス料金減額
料金減額
選手の派遣・交流
みかん狩り料金減額
ソーセージ体験料減額・食材提供
チャンコ材料・チャンコ作り人材提供
しし肉カレー・しし肉コロッケ提供
（こどもの絆プロジェクト宛の）寄付金の振込手数料免除
カヌー・レボ 60 個
じゃこ天、つみれ、鯛
24 日昼食「ふるさと料理」材料代
飲料 500ml 他 500 本
お菓子 70 箱
文具一式
カヌー・レボ 50 個（2 万円相当）
ジョウキ 50 個
包装用袋 3 種、紙袋 各 40 枚程度
みかん 1 箱
お菓子 30 袋、紅豆汁 多数
みかん 1 箱
23 日、25 日夕食材料代、みかん 1 ケース
24 日、26 日夕食材料代
24 日、26 日夕食用野菜
紅豆汁 多数
みかん大福用みかん 1 ケース
みかん 1 ケース
お菓子 160 個
みかん 20 kg
みかん 20 kg
みかん 20 kg

ご支援頂いた皆様

イタリア料理を愛する会
JR 北海道グループ運営協議会
(財) 都市農山漁村交流活性化機構
次長 花垣 紀之

ACE Ltd.
ACTION MOMCHINA
Akiko Uchiyama
Ayumi Hotta
AYUMI MACHIDA
Benjamin Tichoux
CHIEKO TAKEMURA
CHIYUMI SATO
DUMMITT SACHIKO ※
Edye Kamensky ※
ERI ADACHI
Fijimoto Kazumi
Fumihiko Yoshimura
GAKUJI ITO
Glenn McDougall
goto yukio
Hagihara Koryo
Hanako Aoyagi
HIDENOBU SASAKI
Hiroe Suzuki
Hirohiko Yoshida
Hiroko Kashimoto
HIROKO KURAMOTO
Hisayo Ishida
Hitomi Iguma
JUN YOSHIKAWA
Kaori Iemoto
Kaoru Kondo ※
KAYOKO MIYATAKE
Kazuyo Hasegawa
kenichiro irie
KENJI INOUE
Koichi Okita
Koji Narita
Maggie Bygate
makoto keino
Mary Rice
Masanori Ikeda
Masayo Yairo
MASAYUKI ISHIDA
Mayu Endo
Mayumi Kamio
Mayumi Noda
Mayumi Takizawa
MEGUMI NISHINO
Michiko Ikeda
midori doi
MIKIKO KOJIMA
Mikiyo Yamaguchi
Mitsue Iwanaga
Miwako Hamanaka ※
MIYA SODA
MPI パ - ト - キッズ ハウス
Na Wai Iwi Ola チャリティ Hula
コンサート in Mt.Fuji 実行委員会
nanae yukioka
Nanako Shimizu
Nishida Kensaku
NORIHIRO MATSUKAWA
Noriko Mori
Norishige yasue
NPO 教育支援協会北海道※
OKAZAKI KAZUKO
REI HAYASHI
SASAKI KIKAKU
Shoko Yoshida
SHOTA NAKAJIMA
sonoda toshikazu ※
Steve Petrik
Sumiyo Fukuyama
Susumu Tsuruhashi
Tamotsu Fujita
Tania Oka
Tetsu Kaneko
TOMOE SHIRAIISHI
Tomoko Kaizu
Tomoko Kataoka
Tomoyuki Ishida
Toshiko Akiyama
Tsuyoshi kumakura
YASUNAGA ICHIKAWA
Yasushi Ichikawa
YOKO KANNO
Yoko Onoda
yoshimi yamaguchi
Yukari Okita
Yukari Yamauchi
YUKIKO SHIMURA
yuko fujii ※

Yuko Suzuki
青柳 加奈子
青山 明子
赤坂 聡美
赤塚 美佐
浅井 薫
浅井 律帆
朝倉 奏
朝倉 裕子
浅野 千悦子
アノミ
吾妻 麻美子
阿部 亜希子
阿部 加奈子
阿部 純
アベ ユミコ
天野 由紀
綾野 奈美
鮎川 徹志
アノウ HIRO E モリカ
アノウ KC HIRO E モリ
飯田 琴美
池内 あや
イガミ マサキ
石井 里佳
石塚 利美
石塚 玲子
井田 奈知世
伊丹 千晶
伊藤 優子
今泉 悦子
岩井 和美
岩川 まさこ
岩浅 亜紀
岩佐 幸
岩崎 知子
岩本 記代子
イヅミ ジョウヤ
上遠野 幸
カミラ ミコ
宇治川 聡子
内海 有紀子
梅田 初美
浦 睦世
遠藤 敦子
遠藤 早弥佳
大石 香織
オカシス - プ - フミ ジョウシ ※
大澤 永子
太田 沙綾香
オカシ アキ
大谷 英子
大津 裕子
大藤 利通
オカシ ハコ
大矢 麻里
小笠原 陽子
岡嶋 比佐代
岡田 宏子
岡田 美穂
岡部 晴子
小木曾 涼子
奥沢 由美
奥田 美香
尾世 千浪
落合 美由紀
鬼頭 美佳
織内 雅美
恩田 寿美子
ガイコウケン
カヒ ユカリ
葛西 美代子
梶岡 和香奈
鹿島 裕子
柏木 美佳
カキマ トコ
加藤 義乃
カウミ
カガリ (フクシマキッズ) フ
金澤 真弓
金原 都香
金岡 正盛
金田 早織
加納 芳香
神島 由美
川口 綾子
川瀬 亜希子
河西 まどか
カハラ ケコ
川村 祥子
河村 信介
カダシス ミヨウチヨウ
木内 千枝
岸 直子

岸本 文江
北川 一恵
北詰 照子
きっとツナガル募金
君嶋 豊
木村 沙子
モウチ
木村 美羽
木村 優希
キタツブ シンゲン センタ -
葛野 禮子
窪崎 まゆみ
久保田 晶子
久保田 千恵
窪田 麻紀子
グランデル 教子
黒澤 知代
黒瀬 玲子
煙石 茂人
ケラハー 幸子
コガ ケニサ
古賀 裕美子
小島 祐子
コソフレットアテナガブリエラ
ゴトサ
後藤 澄子
後藤 悠子
後藤 和子
ゴモキス カゴロジ
小林 史子
小林 諭子
小原 三佳
コマサ アキ
米森 一也
小森 聡子
小柳 光代
齊藤 由佳
サカド コウ - トカガジ
坂根 里英
坂本 桃子
櫻井 香菜
櫻井 翔太
佐古 靖子
佐々木 道男
ササキ カリ
佐藤 崇倫
佐藤 初崇
サウヒロキ
佐藤 ふみ
佐野 玲子
三宮 純子
ジザカケラ
シガワ マサチカガ
島崎 峰
島田 千絵
清水 美枝
周藤 奈津紀
白浜 真里子
シゲウイズミ
末木 菜穂
杉谷 江里子
杉谷 尚子
杉本 崇
杉村 千恵子
杉山 洋平
鈴木 歩己
スライスツバ - ス
瀬川 司
妹尾 智美
添田 百合
曾根 亜紀
高木 幸子
高島 千里
高田 寿子
カネ アキ
高野 裕未
カウチ アキ
武田 彩香
田代 芳久
田寺 千穂
田中 起始子
田中 久美子
田中 幸
田中 悟朗
田中 里枝
田中 理子
田辺 淳
谷川 琴子
谷口 峻哉
谷渕 淳子
田原 雅子
ダブル 悠美
たまきはる基金
玉林 峯子

田山 鮎子
鍛示 えりな
築比地 詔子
筑場 隆子
津田 幸子
堤 祥子
椿 綾子
ツシムコ
出口 伸江
遠山 智絵美
トセ) トウケンシヨウカ
トダミコ ※
刀根 恵子
豊田 麻奈
中上 香
中江 由希子
中川 智子
長島 千穂
中西 ひとみ
ナカノ リト
中野 由香里
ナカミコ
中町 一彦
中村 安希
中村 公子
中村 奈津樹
中村 浩美
中村久夫 様
中山 靖子
南雲 友賀
那須 真理
新原 則子
西谷 恵子
西森 弓美子
西山 香織
根本 祐輔
能正 麻衣子
野木森 菜月
野崎 ひろこ
野地 知子
ハシト リコ
波多野 益美
ハトリ アキ
濱崎 曜子
ハラダ コウジ ※
畔蒜 久美子
ビ - クラフガ - デン
ビ - スカルチャ - ネットワ - ク
樋田 禎美
日塔 久江
日野 桜子
ヒヤマ タカ
平峯 和香
蛭田 雄介
ヒタチ サチ
福井 貞子
フクシマキッズ ショカジ ツコ ※
福田 弥生
福田 芳正
藤井 弘子
藤嶋 成子
藤本 範子
古川 美有樹
古田 浩美
星野 オリヴィエ直治
星野 桃代
北海道教育大学岩見沢校教職員組合
堀内 京子
本間 志穂
増田 奈穂
松岡 啓介
松村 亜希子
松本 真理
三浦 利夫
水谷 有紀子
溝淵 尚子
三井 絵里子
南 あかね
南 扶友子
三原 かおる
ミウチリコ
宮地 香納
宮道 いつか
宮本 あゆみ
ミヤト キョウ
宮本 静香
三好 和枝
向井 幸恵
村井 沙奈映
村上 真依子
ムカボト ケイヨミルコウ
村瀬 佐保子
最上 佳昭
モチキ リコ ※

桃原 由希
森 沙智子
森岡 理佐子
諸岡 直子
矢島 由紀
柳崎 由梨
梁田三代子 様
ヤ - ビジネス - ビス ※
ヤ - (カ) ※
山口 里美
山口 摩以子
山路 裕子
山下 遥
山下 浩美
山田 菜美
山田 瞳
ヤマノウエ - ケツジ ツコウ
山村 清佳
ヤマモト ナシ
山元 隆広
山本 典子
山本 優子
ユ) ガイ - ル
有限会社光信電機 様
行方 修子
横井 和雄
横井 恵子
横川 聡子
横山 友恵
横山 由美
吉形 ゆかり
吉田 治美
善元 寿仁
吉本 隆行
米澤 真由美
レディースセミナー受講生の皆様
六車 奈穂子
若林 桜
和田 知子
渡辺 喜代子
渡辺 純世
渡辺 千典
渡辺 凌一
ワタベ レイ
渡部 智美
芦田 恵美
伊丹 千晶 ※
伊藤 理恵子 ※
井上 晃 ※
磯部 孝夫 ※
稲葉 久仁子 ※
園田 季一 ※
岩下 和彦 ※
吉元 章雄 ※
宮野 稔 ※
近藤 美穂 ※
恒川 次郎
三浦 菜摘 ※
三木 節子 ※
社会福祉法人クビド・フェア
若松 里佳 ※
秋山 敏子 ※
勝田 綾子 ※
小玉 直也 ※
小山内 俊平 ※
小檜山 浩 ※
松本 宏 ※
上村 悦子 ※
石川 紀子 ※
川原田 耕基 ※
川嶋 登千代 ※
曾田 美也 ※
相田紗也可
打本 大志 ※
大井 康 ※
大橋 真佐子 ※
大原 龍 ※
大原 和美 ※
滝山 佳子 ※
中條 貞子 ※
東日本大震災復興支援財団
陶芸教室 / 森魚工房・杉山佳隆
内村 智美 ※
南 律雄 ※
南部 達夫 ※
武田 善雄 ※
武藤 十紅美 ※
福山 光広 ※
平澤 まりこ ※
有木 達也 ※
与良 正男 ※
50 音順
期間: 平成 24 年 9 月 1 日 ~ 1 月 17 日
※は複数回ご支援頂きました方

支援金のお願い

参加した子どもから
ご支援いただいたみなさまに、
感謝のお手紙を差し上げたいと思います

ご支援いただいた方のご住所をお知らせください

「福島の子どもの笑顔と元気応援プログラム
支援金ご寄付のお願い」

福島第一原発事故の被害から子どもたちを守る支援活動を作り出そうとして結成されたのが、「福島の子どもを守ろうプログラム実行委員会」※です。この実行委員会に NPO、行政機関、市民が参加し、「ふくしまキッズ」を計画しています。

活動にご賛同いただける皆様に支援金をご寄付いただき、「ふくしまキッズ」に出来るだけ多くの福島の子どもたちが参加できるようにしていただければと、ご協力をお願いする次第です。どうか全国の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

実行委員長 進士 徹
(NPO 法人 あぶくまエヌエスネット 理事長)

※「福島の子どもを守ろうプログラム実行委員会」は 2012 年 4 月 1 日をもって「ふくしまキッズ実行委員会」になりました

ご支援方法

①お振込み

支援金受付口座:

東邦銀行 棚倉支店 (店番号 305)

普通口座 (口座番号 574540)

ふくしまキッズ実行委員会 実行委員長進士徹

(カナ名義): フクシマキッズジツコウイインカイ

②クレジット

3,000 円 <一口> 10,000 円 <一口>

50,000 円 <一口>

たくさんの方のご支援をいただいたことをお伝えしたいので、寄付者のお名前(カタカナ名)を当ホームページに掲載させていただきます

※金額は非公開とします。あらかじめご了承ください

※掲載を希望されない方は、ご自身の名前の前に

「18」をつけてお振りこみをお願いします

※掲載については数日かかる場合もあります

③ yahoo! ポイント

1 ポイント=1 円としてご利用いただけます

yahoo! インターネット募金よりご支援をお願いします

携帯電話からご利用の際はこちらの QR コードをお使いください (スマートフォン非対応)



支援委員より

放射能の影響が怖いとか何とかというよりも、私は人間の子どもにこそ、もっともっとと広々とした所で思い切り遊んで育って欲しいのです。それが何よりも日本の明日を元気で感性豊かなものにしてくれるに違い無いと信じているからです。大した事は出来ませんが、そのために、この「ふくしまキッズ」プロジェクトのお手伝いは、私自身にとって生き甲斐となる重要な仕事だと思っています。

そんなことをいうと、それじゃうちの子も犬や猿と同じか、と叱られそうですけれど、もしかしたら今は人間の子どもの方が、動物としては可哀想な状況下にあるのかも知れません。

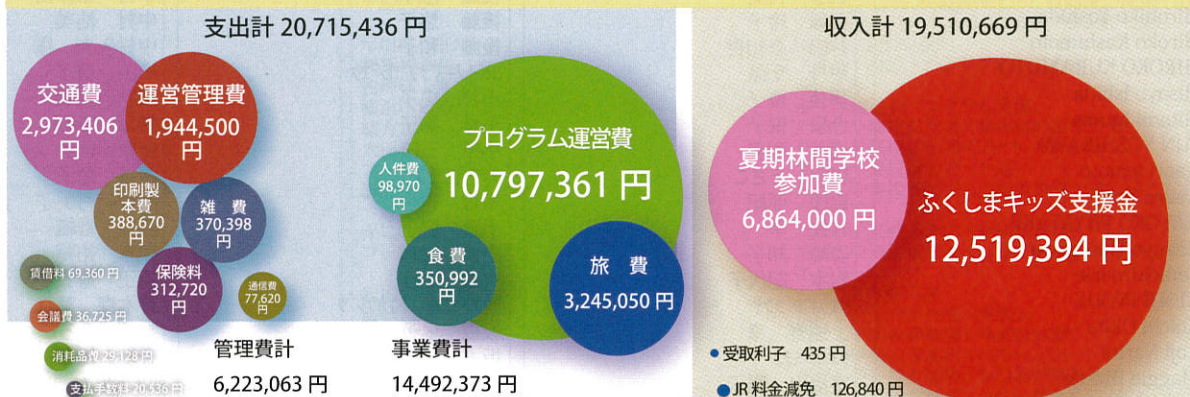
力の向上にも役立ちます。遊びの中から身について行きますし、体力の向上にも役立ちます。



湯川れい子 (音楽評論、作詞)
先日、友人たちと話していた時に、日本のサマーキャンプは、どうして短い期間のものしかないのだろうか...という話になりました。猫も犬も猿山のお猿さんも、子どもの頃は兄弟や仲間達と組んずほぐれずして遊ぶことで、生きる知恵を学んでいきます。コミュニケーション力も、そんな遊びの中から身につけて行きますし、体力の向上にも役立ちます。

会計報告

● 収支差額 ▲ 1,204,767 円 ● 前期繰越収支差額 26,995,314 円 ● 次期繰越収支差額 25,790,547 円



2012 冬のプログラムの収支計算は《http://fukushima-kids.org/》をご覧ください

特別支援団体

Japan Society

Grobal Giving

たまきはる福島基金

協力団体 (各地の後援・共催を含む)

NPO あぶくまエヌエスネット・NPO 教育支援協会・NPO ねおす・NPO 教育支援協会北海道・こどもの絆プロジェクト・環境 NGOezorock・大沼ふるさとの森自然学校・一般社団法人こどものチカラ研究会・北海道教育大学・北海道旅客鉄道株式会社・大沼グリーンツーリズム推進協議会・北海道公民館協会・ゆうばり自然体験塾・ゆうばりネイチャーキッズクラブ・NPO 法人北海道自然体験活動サポートセンター・NPO 夢職人・NPO 放課後アフタースクール・学生団体スタニティ・学生団体 M Dream・横浜子ども支援協議会・NPO オーシャンファミリー海洋自然体験センター・横浜市・横浜市こども青少年局・横浜市体育協会・横浜市野島青少年研修センター・愛媛県・今治市・西条市・愛媛県公民館連合会・子どもを守ろうプロジェクト協議会・七飯町・七飯町教育委員会・松前町・松前町教育委員会・横浜市こども青少年局・伊予市・西予市・愛媛県公民館連合会・伊予市教育委員会・西予市教育委員会・愛媛県公民館連合会主事部会

発行: ふくしまキッズ実行委員会

〒963-8403 福島県東白川郡鮫川村赤坂東野字葉貫 57

info@fukushima-kids.org

http://fukushima-kids.org/

編集: 特定非営利活動法人教育支援協会北海道